

# 小林秀雄と「近代の超克」

## ——太平洋戦争下の文学思想状況とその意義

神山睦美（大阪経済法科大学  
アジア太平洋研究センター）

キーワード：ハル・ノート、世界史的立場と日本、歴史と文学、20世紀の否定神学、原爆投下とソ連侵攻、不在の神という逆説

### はじめに

太平洋戦争開戦後、雑誌「文学界」で企画された座談会「近代の超克」は、西欧近代に対抗する理念をいかにして形成するかという課題を、当時の文学思想界に投げかけた。結果として、後の大東亜共栄圏のイデオロギーを補填する役割を果たすことになったのだが、「文学界」の主要同人であり、文芸批評家として指導的な立場にあった小林秀雄が、このような方向に対していかなる考えを持っていたか。これまで、あまり論じられることのなかったテーマなので、並行して行われた京都学派の座談会「世界史的立場と日本」などとも比較しながら考えてみたい。

### ハル・ノートの意味するもの

1941年12月8日の日本海軍による真珠湾攻撃は、東アジアにおける膠着した状況を打開するための軍事的な作戦という以上の意味を持っていた。端的に言って、それは、アメリカに象徴される近代文明への挑戦であり、西欧的な価値観のもっともモダンな部分への破壊工作といっているものであった。二日後におけるマレー沖海戦が、イギリス艦隊への攻撃というだけではなく、ヨーロッパの覇権に対する抵抗という意味を荷っていたことと同様にといいだ

ろうか。このことは、真珠湾攻撃にいたるまでの日米交渉において、最後通牒のように突きつけられたハル・ノートの内容を検証してみるならば、明らかとなるだろう。

ルーズベルト大統領のもと、國務長官として日米交渉に当たったコーデル・ハルが、日本側の再三の打開案にも関わらず、以下のような内容の条件を提示してきたことは、歴史の知らしめるところである。

「アメリカと日本は、日米英中ソおよびオランダ、タイとの間に不可侵条約を結ぶこと。それによって、日本は中国における権益をすべて放棄することになったとしても、あらためて中国国民党政府との間に対等な関係を保ち、ひいては、日米間の通商条約をいかなる支障もなく締結することができるであろう」。

関東軍による満州侵攻と、国民党政府を認めない日本の姿勢を、重大な国家主権の侵害とみなしていたアメリカ政府は、早くからこのような趣旨の見解を抱いていた。ハル・ノートは、アメリカの政治姿勢を理念化したものと受けとれるので、これを最後通牒とするのは、あくまでも日本側の見方によるものといえる。

しかし、1931年の満州事変以来、中国大陸満蒙地域に新興国家を建設し、世界大に広がる経済停滞から抜け出ようとしていた日本にとって、これを放棄し、もういちど列島日本の権益と国内需給の連関の中に戻っていくことは不可能に近かった。アメリカ発の金融恐慌と経済の後退は、抜き差しならない局面にいたっていたのである。先進資本主義国がこれを乗り切るために、植民地との間にブロック経済を進めている状況で、どうして日本だけが、満州国や台湾

を包括した経済圏から撤退することができただろうか。

実際、世界的な恐慌のさなか、ニューディール政策をおこなった米国と、満州への人的かつ経済的供給をおこなった日本のGDPが、恐慌前まで回復するという事実もあったのである。

このような状況にあって、中国におけるすべての権益の放棄をうたうハル・ノートが、大国の威信をちらつかせるだけの理不尽な要求にみえたとしても、やむをえないところがあった。それだけでなく、資産凍結、石油輸出禁止といったアメリカの強硬な姿勢は、同調したイギリスも含めて、西欧的なものの強大な力を見せつけることになった。外交交渉に当たった日本政府のみならず、日本国民全体に、ヨーロッパ・アメリカに対する根深い怨望をかき立てるきっかけをつくったのも、そのようなアメリカの姿勢であったといえる。

それならば、当時枢軸国として同盟を結んでいたドイツやイタリアは、日本からみて西欧列強とどう異なっていたのだろうか。同じヨーロッパ圏に属するとはいえ、ドイツ、イタリアが象徴しているのは、近代文明や西欧的価値観であるよりも、それらからの遅れであった。後発的に国民国家形成を遂げてきたこれらの諸国は、帝国主義的な侵略政策をすすめるに当たって、イギリス・フランスに代表される列強の植民地政策をそのままに倣ったのである。それは、見方を変えていえば、先進資本主義国への新たな挑戦といっているものであった。

日本における西欧近代への挑戦は、このようなドイツ、イタリアにおける先進近代への挑戦と同位においてあったといえることができる。実際、日本は、ポーランド問題に対するイギリス、フランスの干渉を排するため、独ソ不可侵条約を結び、先進近代国家への挑戦の意味を明確にしていったドイツの姿勢に、東西の垣根を取り払った政治的な共感を抱いていた。

だが、これらヨーロッパ諸国に対して、アメリカの占める位置には特別なものがあつた。アメリカがアジア、太平洋圏に権益を確保するようになったのは、19世紀末の対スペイン戦争に勝利をおさめ、植民地をそのまま引き継ぐか

たちを取ってからなのである。そこには、ヨーロッパ列強のアジア進出とは、微妙に異なる地勢図が描かれていた。

関東軍による満州侵攻と、国民党政府を認めない日本の姿勢を、重大な国家主権の侵害とみなしたのは、アメリカのなかに、帝国主義的な進出についてイノセンスの意識があつたからといえる。この意識こそが、国民国家形成途上にある中国を侵害するかたちで満州国建設を進めた日本のなかに、国家主権と国民意識についてのルール違反を見出した当のものなのである。

これは、ポーランドをはじめ東ヨーロッパの主権国家を次々に侵略していったナチス・ドイツに、同様のルール違反を見出したのと同じ次第においてといってもいいのである。南太平洋から、沖縄諸島を経て日本へと侵攻する米軍と、ノルマンディーに上陸後パリを解放し、ドイツ軍を一掃していった米軍とは、このような理念の実践として同期するといえることができる。

では、アメリカの理念の根本には、いかなる思想があつたのか。ハル・ノートが主張するところの「日米英中ソおよびオランダ、タイとの間の不可侵条約」という事項に注意してみなければならない。すなわち、アジア、太平洋地域において領土を保有する主権国家のユニオンの構想である。それは、そのまま連合国家としてのアメリカ合衆国の理念を、アジア、太平洋地域において、より普遍的なかたちで実践するということであつた。

同時にここには、第一次大戦後、民族自決主義を掲げて国際連盟の設立を促したウィルソンの政治理念が、反映されていたのである。

実際、ハル国務長官は、太平洋戦争のさなかに国際連合の構想を提案し、米・英・中・ソによる国連憲章の原案作成をおこなっていた。それは、ハル・ノートに示されたアジア・太平洋地域における民族国家連合理念ユニオン・オブ・ネーションズの、全世界的な敷衍といっているものであつた。もちろんこのような動きが、1943年、太平洋および東アジア地域における戦闘において、日本の敗色濃くなりつつあつた時点で起こってきたことを考慮に入れるならば、いずれ戦勝国となっていく国家どうしの、戦後処理という問題をはらんで

いたことはまちがいない。にもかかわらず、ここには、太平洋戦争開戦後の日本にとって、戦略的にも理念的にも盲点とっていいような問題がこめられていたのである。

## 「世界史的立場」という理念

真珠湾攻撃が、日本国民のなかに、どのようなエモーションをもたらしたかについては多くの証言が残っている。庶民感情から国民意識、民族の自覚から知識人の責任とニュアンスの違いはあるものの、総じて、明治開国以来の欧米優位のありかたに修正を迫るものであった。しかも、その滾るようなあらわれには、類例をみないおもむきがあった。一例を、吉野作造門下の経済学者住谷悦治の『大東亜共栄圏植民論』の一節と、そこに引かれた政治学者南原繁の歌二首によって示してみよう。

「宣戦の大詔が煥発せられるとともに、一億国民の向ふべき処は炳として天日の如く明らかになり、すでにそこには寸毫の狐疑も逡巡もあるべき筈がなくなつた。満州事変以後十年間、支那事変を経て大東亜の黎明を感じたわれら日本人は、十二月八日の大詔を拝するに及んで、新東亜誕生への光明に、痛きまで身心に感激を覚えたのである」 住谷悦治

「南の洋に大きき御軍進むとき富士が嶺白く光りてしづもる」

「ひたぶるの命たぎちて突き進む皇軍のまへに ABCD 陣空し」 南原繁

子安宣邦『「近代の超克」とは何か<sup>(1)</sup>』に引かれたものだが、これらをもって、一級資料というにはおよばない。内村鑑三の弟子として、生涯、無教会主義キリスト教信者を通した南原繁にして、このような歌を詠まずにいらなかった、そういう驚きはナイーブにすぎるのである。戦争詩、戦争詠の類を検索していくならば、まさかこの文学者がというような例が次々に出

てくる。問題は、むしろ、それらのひとつとして、日本の再生が、ハル・ノートに示されたような日・米・英・中・ソを中核とする国際的なユニオンとアジア・太平洋地域におけるユニオン・オブ・ネーションズ民族国家連合のなかでなされていかなければならないという構想の一端にも触れえなかったというところにある。

それには、もちろん理由があった。1938年近衛内閣によって提起されていた「東亜新秩序」の理念が、彼らの無意識を拘束していたからである。欧米列強のアジア支配に抗して日本・満州・中国による圏域をつくりあげていくというその理念が意図していたのは、国民意識の底流にある欧米への反動感情に、積極的に棹差すことだった。後の大東亜共栄圏構想が、これを基にして打ち出されていったことは周知のところである。

東アジアにおける民族国家連合は、この構想において、日本国天皇を盟主とする日・満・漢・鮮・蒙の民族協和体制とみなされていった。これが、石原莞爾の最終戦争論に起源をもつことは明らかなのだが、実際には、そこで唱えられた五族協和、王道楽土といったユートピア的な理念は骨抜きにされ、欧米列強への対抗意識を流し込むための鋳型のようなものとして現出したのである。実際、そこに現れたのは、ハル・ノートの示す日本再生構想の陰画といっているものだった。アジア・太平洋地域におけるユニオンが、後における全世界的なユニオンの雛形となるといった理念は、どこにも見出すことができなかつた。

だが、これを真珠湾攻撃をリアルタイムで受けとった国民の共同感情のなかにおいてみるならば、やむをえない面があったということもできる。そういう臨場的な興奮を差し引いてみるならば、それから前後数ヶ月の間に行われた「世界史的立場と日本」「近代の超克」においては、事態を客観的に捉えたいうで、批判的に受容するということがあって当然と考えられるのである。たとえば、そこに、住谷悦治、南原繁といった人々が加わっていたとしよう。経済学

(1) 子安宣邦『「近代の超克」とは何か』青土社、2008年、121～122ページ

者としてあるいは政治学者として、先のような感慨とは異なるものを示したにちがいない。そのような予断のもとに、1942年1月、雑誌「中央公論」に掲載された前者の記録をたどっていくと、次のような言葉に出会うことができる。

「大東亜戦争の勃発は、既に殆んどその校正も終らんとする時であった。我々は言い表し難き感謝と覚悟の中に、我々の思索が厳粛なる世界史的事実によって裁かれるのを見守っていた。しかし尊厳なる国体の精華は艱難に会って益々宣揚せられ、海に陸に皇軍の威容は世界の人心を衝動した。「我々は深く皇国の鴻恩を肝に銘ずると共に、我々の論議のさまで正鶴を逸せざりしを、密かに自ら慰めとしたのである<sup>(2)</sup>」。

ここに現れているのは、住谷の『大東亜共栄圏植民論』と少しも変わらない文体である。「天日の如く」「寸毫の狐疑も」「新東亜誕生への光明に」といった言葉が示す感情の上滑りに比べれば、「我々の思索が厳粛なる世界史的事実によって裁かれるのを見守っていた」という表現の客観性は動かしがたいようにみえる。にもかかわらず、いわれるところの世界史的事実に、どのような批判的精神も見出すことができない。少なくとも、この世界史的事実が、「世界歴史の上における日本の使命」「日本の世界歴史における現在の位置」という言葉で表される限り、そこには、いかなる実質的な根拠もみとめることができないのである。

「世界史的立場と日本」が、京都学派といわれる4人の哲学者、歴史学者によっておこなわれたことは、よく知られている。高坂正顕、高山岩男、西谷啓治、鈴木成高という西田幾多郎門下の学徒であるが、彼らの西欧文化に対する深い造詣は「世界史の哲学」といった言葉に象徴されている。そこに、カント的な世界平和の構想、ヘーゲル的な世界史における自由の実現という理念が投影されていることは、まちがいない。

だが、カントにとってもヘーゲルにとっても「世界」とは、人間存在の非融和性と切り離すことのできない概念であった。非社会的社交性を負わされた人間が、どのようにして他者と関係を結び、普遍的な理念を構成していくことができるか。人間と人間との承認をめぐる闘争が、何をきっかけとして絶対精神へと向かうことになるのか。カントもヘーゲルも、このような問いの場所から「世界」を構想したのであって、それらが、永遠平和のための教義としてあらわれる場合でも、後発近代国家の法理念としてあらわれる場合でも、非人間的と見まごうような特殊性を、どのように世界へと開くことができるかという関心が問題の核心にこめられていた。

これに対して、京都学派の唱える「世界史的事実」「世界史的立場」には、先験的かつ絶対的な価値の世界性を前提とするところから、問題を起動するといったおもむきがあった。

世界が動かしがたい客観として現れるとしても、それを認識する仕方には、個々の主観が関わらざるをえない。そういう背理を突き詰めていくとき、客観的ということでは測ることのできない「物自体」という概念が要請される。カントのアンチノミーとは、そのような思考のなかではぐくまれていくものであった。客観をまとったかのような存在が、いまだ主観に囚われている者を従属させることで世界を構成していったとしても、後者のなかの自由への嚮望とその実践によって、やがては世界そのものの編み変えがはかられていく。ヘーゲルのディアレクティックもまた、こういう思考によって鍛えられていくものであった。そこにみられる、審級そのものの可変的なありかたを、「世界史的事実」「世界史的立場」に探し当てることは困難なのである。

彼らが、カントやヘーゲルに拠っているようでいて、デイルタイの生の哲学やリッケルト、ランケの歴史哲学の流れにくみし、そこに世界史の哲学を打ち立てているという点に齟齬の生じる理由がある。そう言ってみたとして、しかし、生の体験と生きた精神の力に文化や歴史を

(2) 河上徹太郎、竹内好他『近代の超克』富山房百科文庫、1979年、316ページ

生み出すモメントをみとめたディルタイにしても、人間精神のなかに、生命そのもののモラリッシュ・エネルギーをみとめ、その多様なあり方に世界史の動因をみいだしたランケにしても、これを国家共同体の使命として受けとる視座はなかった。そこに現れる歴史主義的な立場に、世界の諸存在を生命の力によって包括し、統合しようとする傾向をかぎつけ、批判をくわえたフッサールが、一方において、歴史のなかに普遍的精神をみとめるにやぶさかではなかったということも事実なのである。

そうであるならば、「世界史的立場」の主張には、カントやヘーゲルの世界性からも、ディルタイやランケの力動性からも、微妙にずれたものが含まれていたということになる。いったい何が、彼らの理念を偏向させることになったのだろうか。そこには、彼らの師である西田幾多郎の哲学が関わっているといっているのだが、これを検証する前に、彼らと同様ディルタイの生の哲学を現実的に受け取るかたわらで、みずからの歴史観をかたちづけていた存在について考察してみなければならぬ。すなわち、座談会「世界史的立場と日本」から数ヶ月へておこなわれた座談会「近代の超克」の主導的な立場にあった小林秀雄である<sup>(3)</sup>。

## 「戦争と平和」の交錯する場所

小林秀雄が、真珠湾攻撃に際して起草した文章として記憶されるのは、1942年『文学界』3月号に発表された「戦争と平和<sup>(4)</sup>」である。

「正月元旦の朝、僕は、帝国海軍真珠湾爆撃の写真が新聞に載ってゐるのを眺めてゐた」という一節ではじまり、「空は美しく晴れ、眼の下には広々と海が輝いていた」「真珠湾に輝いていたのもあの同じ太陽なのだ」「あの同じ冷たい青い塩辛い水が、魚雷の命中により、かつて物理学者が仔細に観察したそのままの波紋を

作って広がったのだ」「太陽は輝き、海は青い、いつもそうだ、戦いの時も平和の時も、そう念ずる様に思い、それが強く思索していることのように思われた」と続くこの文章において、小林は、住谷悦治の『大東亜共栄圏植民論』にみられるような「天日の如く」「寸毫の狐疑」「新東亜誕生への光明」といった語句を一切封印する。同時に、「世界史的立場と日本」にみられる「言い表し難き感謝と覚悟」「尊厳なる国体の精華」「皇国の鴻恩」といった表現をもみずから禁じている。それは、言葉と文体に思想の身体を賭けていた文学者として、当然のことであった。

だが、同じ「文学界」同人として、小林と共に文芸批評の確立を目指していた河上徹太郎の、以下のような文章を参照してみるならばどうか。

「遂に光榮ある秋<sup>とき</sup>が来た。しかも開戦にいたるまでの、わが帝国の堂々たる態度、今になって何かと首肯出来る、これまでの政府の抜かりない方策と手順、殊に開戦劈頭聞かされる輝かしい戦果。すべて国民一同にとって胸のすくのを思わしめるもの許りである。今や一億国民の生れ更る日である。しかもそうなるのを他から強要されるのではなくて、今述べた眼前の事態がすべて我々をして欣然そこに至る気持ちを湧き起させてくれているのである。こんなに我々が陛下の直ぐ御前にあって、しかも醜<sup>しこ</sup>の御楯となるべく召されることを待っているとは、何といてもこういう事態が発生せねば気付かなかったものであろう<sup>(5)</sup>」（「文芸時評 光榮ある日」『文学界』昭和17年1月号）

この文章が、住谷悦治や京都学派のそれとエートスを共有していることは、すぐみとれる。前者が、大なる歴史の瞬間に立ち会った興奮を、主観性の脱構築ともいべき独特の文

(3) 小林秀雄におけるディルタイ理解については、綾目広治「小林秀雄—その思想論、歴史論、言語論」『脱文学研究—ポストモダニズム批評に抗して』日本図書センター、1999年、参照。

(4) 小林秀雄「戦争と平和」『小林秀雄全集第7巻』新潮社、1978年、166～167ページ

(5) 河上徹太郎、竹内好他『近代の超克』富山房百科文庫、1979年、297ページ

体によってあらわしているのに対して、河上のそれが、どこか主観性の立場から抜けきれないでいるという違いがあるとしても、帰するところはひとつ。欧米列強に抗して、世界の歴史に大東亜の精神を刻することが、日本の使命にほかならないという思想である。河上の文章に「新東亜誕生」の言葉も「国体の精華」の言葉もなく、あるのは「光榮ある秋」「一億国民の生れ更る日」「醜の御楯」という言葉だけである。にもかかわらず、それらの向こうから「東亜新秩序」を打ち立てるべく米英を駆逐せんとする一億国民の生命の力といったものが現れてくるのを否定できない。このことは、河上よりも亀井勝一郎、林房雄、保田與重郎といった者たちの言葉を聞いてみれば、一層明らかとなる。

だが、かんじんの小林秀雄になると話が微妙に異なってくる。その言葉には、主観性の脱構築もみとめられなければ、主観的であることの表象といったニュアンスもみられない。代わってあらわれるのは、主観性のシフトを完璧にニュートラルな場所にすえることによってうみだされた文体である。真珠湾爆撃の写真に映った光景について、『戦史に燦たり、米太平洋艦隊の撃滅』という大きな活字は、躍り上がる様な姿で眼を射るのであるが、肝腎の写真の方は、冷然と静まり返っている様に見えた」と小林は述べる。江藤淳によって「死と非現実と絶対を示す象徴<sup>(6)</sup>」と評されたこの小林の叙述は、戦争を、人知の及ばない自然災害とみる思想からやってくるものといえる。小林は、抒情的とみまごうばかりの叙述をあえておこなうことによって、人間の主観性が、この大災害を前にすすべなく佇むすがたを描き出すのである。

すでに日中戦争勃発の年に起草された「戦争について<sup>(7)</sup>」において、小林は、戦争というものが、一国民にとって運命のようにやってくるものにほかならないという考えをあらわしていた。国民国家間の戦争は、国民一人一人に、避けることのできない必然としてあらわれるので、

そのような事態に対処するためには、これを受け容れるだけの知恵をみずからのうちに育てることであるという。このような戦争観が、真珠湾爆撃に際して、主観性のニュートラル化を押し進める動機となったことはうたがない。くだんの文章において、小林は、紺碧の空と藍色の海と白い水脈について語りながら、一方において、米太平洋艦隊を爆撃する戦闘機の兵士の眼に映った光景もまたこれと変わらないものであるというのである。

それは、戦争を必然の運命とする知恵を、みずからのうちに育てた一国民としての兵士の、覚悟の攻撃ということになるのかもしれない。しかし、それ以上に、この光景は「カメラの眼に酷似した眼で鳥瞰した」ものにほかならず、ある超越的な場所から俯瞰されたものといわねばならない。それを小林は、「衆生の眼に業火と映るところも、私の眼には楽土と映る」といった言葉を引きながら語る。そういうパラドックスを駆使することによって、戦争が、人間にとって、動かすことのできない外在性としてやってくるといおうとしたのである。兵士の眼とは、そこでカメラアイに託され、さらにはこの超越的な外部の眼に託される。戦争を人知の及ばない大災害ととらえる思想が現れるのは、ここからなのである。

この思想は、ロレンスの『チャタレー夫人の恋人』にあらわれた「悲劇」についての考察を通して明らかにされるのだが、戦後発表されたこの「政治と文学<sup>(8)</sup>」という文章において、小林が戦争期の態度に反省をくわえたとみるのは、僻見にすぎない。むしろ、みずからを顧みて問然するところないことをあらためて確認しているといっている。戦争が国民一人一人をローラーでならし、人的資源としていくという思想は、それを超越的で絶対の外部から襲ってくる天災のようなものととらえる視点から帰結するものなのである。

このような小林の思想は、歴史についても適

(6) 江藤淳『小林秀雄』講談社、1965年、56ページ

(7) 小林秀雄「戦争について」『小林秀雄全集第4巻』新潮社、1978年、288～290ページ

(8) 小林秀雄「政治と文学」『小林秀雄全集第9巻』新潮社、1979年、68～70ページ

用される。太平洋戦争開戦に、「世界歴史の上における日本の使命」を感じ取った京都学派の哲学者や歴史学者と小林とが異なるのは、どのような決断や使命からも遠く、人間を翻弄する歴史のすがたを、超越的な外在性としてとらえている点にある。ディルタイの歴史主義的な生の哲学は、こういう歴史に対していかなる態度をとりうるかという問いのもとに参照されたのである。

## 歴史とは人類の巨大な恨み

真珠湾攻撃の3ヶ月前に当たる昭和16年9月、小林は、みずからの歴史観の集大成ともいえる『歴史と文学』を上梓している。

「歴史とは人類の巨大な恨みに似ている。歴史を貫く筋金は、僕らの愛惜の念というものであって、決して因果の鎖というものではない<sup>(9)</sup>」という言葉が、そこには記されているのだが、このような小林の歴史観が、子を失った母親にとって、子供の死とは何かという問いから形づくられたものであることは明らかである。「子供の死という歴史的事実」を前にして、母親のなかに「かけがえのない命が、取り返しがつかず失われてしまったという感情」が起こってくるたびに、はじめてこの歴史的事実は意味を持つのである。

だが、小林の歴史観は、歴史に対する態度ということでは、やはりあまりにネガティブなものといわざるをえない。端的に言って、米太平洋艦隊を爆撃する戦闘機の兵士の眼には、紺碧の空も藍色の海も攻撃目標に対する周辺事態として測定されていたのである。そこで問題になっていたのは、いかに正確に敵艦隊を爆撃しうるかということ以外ではない。航空機から爆弾を発射する眼が、カメラアイのようなはたらきをしていたとしても、それはほとんど物理的な正確さの比喩としてなのである。鳥瞰的な視点とは、客観科学がもつ外在性のそれといっ

ていいので、西欧近代が実現してきた方法が象徴しているのも、このような外部の眼なのだ。

高坂正顕や高山岩男といった京都学派の人々が、いち早く感知していたものこそ、米英を中心とした勢力が、巨大な外部の眼となって戦争を遂げていく事態であった。廣松渉は『〈近代の超克〉論<sup>(10)</sup>』において、彼らの哲学や歴史観を丹念に検証している。それはたとえば、人間が機械によって自然を支配してきたところに西欧近代の弊害を認める観点であり、自然の支配が、客観的方法によって合理的におこなわれるとき、人間にとっての自由はなみされ、人間中心主義、機械中心主義、唯物主義がはびこることになるという視点である。拡大する資本主義的な生産が、列強の帝国主義的な侵略に正当性をあたえることになったとしたうえで、西欧の強大な力による植民地アジアの収奪を世界史の進展の動因とみなしていく歴史観に、根底から批判を向ける立場ということもできる。

とはいえ、このような理念が、反近代のそれとしてみた場合、小林秀雄にくらべて、特別オリジナルなものであったというわけではない。資本の収奪と帝国主義的な侵略を、世界史の実現の手段とする西欧中心的歴史観は、彼らの批判を待つまでもなく、ウィンデルバントやリッケルトといった新カント派の歴史科学的方法によって組み換えを迫られていた。その方法が、西欧近代の歴史をモラリッシュ・エネルギーの名のもとに脱構築していく高山岩男の歴史哲学などに結実していたということが出来る。その高山において、ランケのいう「世界史の発展の中に認める」「諸々の力」としての「精神的な力、生命を生み出すところの創造的な力<sup>(11)</sup>」は、西欧近代の罪悪を浄化し、日本の国体の永遠性を輝かす力としてことあげられていた。西欧近代がかたちづくってきた客観主義、そこに現れる外在的視点を、生の経験や力動する精神によって内側から組み直していこうとするランケやディルタイの思考は、彼らの歴史意識のなかで、

(9) 小林秀雄「歴史と文学」『小林秀雄全集第7巻』新潮社、1978年、206ページ、210～211ページ

(10) 廣松渉『〈近代の超克〉論』講談社学術文庫、1989年、40～44ページ

(11) ランケ「列強論」村岡哲訳『世界の名著 続11』中央公論社、85ページ

独特のバイアスを掛けられていたのである。

このバイアスが、高山らの思考の根底にある対抗的な傾向に起因するものであることはいうまでもない。ランケのモラリッシュ・エネルギーは、西欧近代がかたちづくってきた強大な力を覆して、国体の明徴化をすすめる原動力とみなされ、外的な歴史に呑み込まれることのない生の経験についてのディルタイの考えは、同じように、内的な経験の純化としての東洋精神として受けとられていくのである。このことを、ディルタイ自身の生の哲学を、直接、小林の歴史観に対置して検証してみるならばどうだろうか。そこには、功罪こもごものより明確な像が描かれるにちがいない。『精神科学序説』の、次のような一節を参照してみよう。

「たんなる表象作用にとって外界はつねに現象にすぎない。これに対して、意欲し、感じ、表象するわれわれの全存在には、われわれの自我と同時に、そしてわれわれの自我と同程度の確実さで、外的現実（すなわち、その空間的諸規定を完全に度外視しても、われわれからまったく独立した他のもの）がわれわれに与えられている。したがって、たんなる表象作用としてではなく、生として与えられている。われわれが外界について知るの、結果から原因を推論することによってでもなければ、この推論に対応した過程によってでもない。むしろ原因と結果についてのこの表象そのものが、われわれの意志の生からの抽象物にすぎない。このようにして最初は、われわれ自身の内的状態を告げ知らせるにすぎないと思われた経験の地平は拡大される<sup>(12)</sup>」

ここにあらわれているのは、子供をなくした母親の悲しみといったものではない。死んだ子を愛惜することで反復される喪の経験ということでもなければ、そういういかんともしがたい事態のなかに、歴史の起ちあがるすがたをかいまみるということでもない。むしろ、子供の死

という事実を前にして、感じ、表象し、意欲しさえするところに、たんなる事実ではない、現実としての死が与えられるという思想である。小林秀雄の歴史観にくらべるならば、ディルタイのそれははるかにポジティブであり、歴史のリアリティを明瞭なかたちで感じさせるものということができる。

だが、このような思想が、一方で、高山岩男をはじめ、京都学派の哲学者、歴史学者の対抗的理念に根拠をあたえたということも事実なのである。そこには、ディルタイのいう生の経験が、小林の歴史観にくらべはるかにポジティブであるというそのことがかかわっている。現象としての外界と意欲する自我、因果についての表象と意志としての経験といったかたちで、二項対立的な思考を確実に推し進めていく仕方に問題があるといえいいだろうか。視点を変えれば、それは、どのようにでも換骨奪胎できるものにほかならず、絶対的な外部としての西欧近代と内的な経験の純化としての東洋精神といったぐあいに、組み替え可能なものとなるのだ。そのことで、京都学派にかぎらない当時の知識人のエートスを浚っていった。そのことは、容易に想像できる。

小林秀雄の歴史観には、このような発想はみとめられない。ディルタイのいう内的な意志や生の経験というものは、外界の必然性に打ち倒された精神の、愛惜とともに醸し出される悲しみの感情へと変奏される。前者のポジティブなありかたは完全に反転され、意志や力の関わらないネガティブな流れが現れるのだ。西欧近代の客観主義に対して、対抗的な立場を取るのではなく、それとはまったく異なった場所に、発想の根拠をおくもの。近代と反近代、西欧と東洋、列強とアジア、民族国家連合と東亜共同体といったかたちで現れる二項対立的な図式には一切関知しない場所。

だが少なくとも、そのことによって小林の歴史観が、生の哲学や歴史主義が実現してきた、近代を内側から組み替えるという発想に固有の

(12) ディルタイ「精神科学序説1」牧野英二編集／校閲『ディルタイ全集第1巻』法政大学出版局、2006年、9ページ

問題点を照らし出すことになったということも確かなのである。ディルタイの思想に、世界の諸存在を生命の力によって包括し、統合しようとする傾向をかぎつけ、批判をくわえたフッサールの方法意識<sup>(13)</sup>に通ずる仕方でもっていい。小林は、どのような共同性の思考にも距離を置くという独特のスタンスを取ることによって、生の哲学や歴史主義が陥りがちな、内と外の二元化という弊を示唆していたのである。

## 「近代の超克」と否定神学

戦争を国民の運命と受け取ったうえで、銃を取らなければならないときがきたら、一兵士として戦うだけであるとする小林の考えは、太平洋戦争開戦においても、変わることがなかった。喜んで国のために死ぬであろうとまでいわれた国民の覚悟というのが、歴史の必然を肌で感じ取るところにおのずから現れたものであるということは、述べてきた通りである。このような思想を貫き通すとき、戦争にあたっての文学者の立場について発言するということには、どういう意味があるのだろうか。そこにいささかなりとも、ポジティブな姿勢が現れるのであれば、そのネガティブイティは根拠を失うのではないか。にもかかわらず、小林は、座談会「近代の超克」において次のような発言をおこなっているのである。

「僕らは近代にいて近代の超克ということ言うのだけれど、どういう時代でも時代の一流の人物は皆その時代を超克しようとする」「その点に眼を据えようとする、当然今までの僕らが非常に影響されて来たところの歴史観をどうしても根本から変えてゆかなければならぬ事になってくるのです。近代の史観というものを、おおざっぱに言えば歴史の変化に関する理論と言えらると思うのですが、これに対して歴史の不変化に関する理論とい

うものも可能ではないかと考えるのです」。「そういう立場から観ると、歴史を常に変化と見えあるいは進歩というようなことを考えて、観ているのは非常に間違いではないかという風に考えてきた。いつも同じものがあった、いつも人間は同じものと戦っている—そういう同じもの—というものを貫いた人がつまり永遠なのである<sup>(14)</sup>」。

「近代の超克」とは、芸術論でもなければ文化論でもない。真珠湾攻撃と大東亜共栄圏のイデオロギーに対して、いかなる態度を取るかという政治的な意図をもった会議である。とするならば、この小林の発言は、明確な立場の表明としてなされたものと考えていい。それは、近代が発展史観から成っていることをみとめたうえで、これに対するには、どのような歴史においても変わらないものをよりどころとするという立場である。そのうえで、この発展史観が、歴史必然的なものとして現れてくるとき、歴史は、これを超克しようとする者を絶えず生み出してきたとされるのである。

竹内好にしても廣松渉にしても、「近代の超克」論を展開した者は、この小林の立場によって、くだんの会議のもつ政治的な意図を代表させることはできないとしている。歴史の変化に汚されることのない永遠の価値ということであれば、日本古典のなかに、ロマン的イロニーの精神を見出していった保田與重郎のなかに、より明瞭なかたちで現れているからだ。実際に保田は、事情があって座談会に欠席したという経緯があるのだが、「文学界」同人では、亀井勝一郎が日本ロマン派のエートスを代表していた。さらには、小林と最も近い位置にあった河上徹太郎に、それは現れていた。先にあげた文芸時評「光栄ある日」に言挙げされた「光栄ある秋」<sup>とき</sup>「一億国民の生れ更る日」「醜の御楯」というのが、そのような永遠を示唆するものではないとはいきれないのである。

(13) フッサールのディルタイ批判については「厳密な学としての哲学」小池稔訳『世界の名著 51』中央公論社、1970年、参照。

(14) 河上徹太郎、竹内好『近代の超克』富山房百科文庫、1979年、219～220ページ

だが、「近代の超克」の立場を河上徹太郎や亀井勝一郎にみとめるのは、小林に比べて彼の方が、明確な態度を打ち出していたからではない。小林の歴史観には、どのように積極的な発言の体裁を取ろうと、それに見合うようなエートスをみつけだすことができないからである。端的に言って、同じ「近代の超克」における亀井の以下のような言葉―「歴史にふれて、暗澹の情熱と無念の思いに胸ふさがれぬものがあるうか、信仰をめざして、無償の行の悲痛を思わぬものがあるうか。未来が何ものであるかの証明は、ただ犠牲によって可能だと彼らは教える。自らの手を汚すことなく、古典の精神が未来にわたって何事かを成就してくれるであろうといったような妄想ほど愚かなものはない<sup>(15)</sup>」―という言葉に参照するならば、これが西欧近代の実現した諸々の価値を全否定するところに現れた、一種のイデオロギーであることは、明らかなのである。小林の発言をたどるかぎり、このようなモチーフを見出すことはできない。そのことは、亀井のように否定自体に積極的な契機を体現していくといった次第にはいたらないということなのである。

もちろん、亀井の思考が、西欧近代の否定と日本的な古典の精神の称揚といった二項対立的イデオロギーに必ずしも収まるものではないということもできる。精神とは、変化発展する歴史を前に、一度は挫折したものの謂いであるからだ。この精神は、暗澹とした情熱と無念の思いにとらわれ、信仰へと誘われるのだが、そこには、歴史の同一性という名の神はもはや存在しない。にもかかわらず、無償の行と犠牲のおこないを通して、不在の神への信仰をめざすのである。そのとき、古典の精神が歴史の同一性を超克するものとして、すがたをあらわし、未来が何ものであるかを、変化発展する歴史に代わって告知するのである。

このような思考の型が、キリスト教における否定神学の流れをくむものであり、トマス・ア

クイナスからルター派の信仰をへて、カントやヘルダーリンのなかに現れているということは、よく言われるところである。動かしがたい客観というものがあるが、個々の主観のなかでしか認識できないというカント的なアンチノミーをたどっていくならば、神の不在、世界の不可能性ということが帰結するのは当然といえる。だが、カントの物自体や最高善に象徴されるように、否定神学的な思考のめざすところは、神や世界を否定することによって、それに対抗するものを措くことではない。むしろ、同一的なものの存在を確証できないゆえにこそ、普遍的なものが要請されなければならないということなのである。

## 20 世紀の否定神学

否定神学的な思考の型は、近代の超克が論議された 20 世紀前半において、大きな影響力を持つようになった。それは、存在しない神に祈ると言ったシモーン・ヴェイユから不合理ゆえにわれ信ずと云う埴谷雄高にいたるまで、危機的な時代の精神を象徴するものとして、様々なかたちをとったのである。とりわけ、人間存在を頽落という言葉でとらえることによって、存在者から見放されたありかたを 20 世紀に固有の状況として分析したハイデガーの哲学には、この否定神学が色濃く影を落としていた<sup>(16)</sup>。

ハイデガーにあって、頽落は避けることのできない事態にほかならず、人々はくりかえされる空談のなかで存在者を忘却していくほかはない。そのような状況は、しかし、唾棄されるべきものでもなく、全否定の対象となるものでもない。そうではなく、みづからが存在者から見放され、死のなかに投げ出されていることに気づくとき、背後から襲ってくる存在の呼び声を聞きとめるのである。先駆的の死の決意性といわれるその気づきの様式が、同一なるものを否定することによって、それに対抗する価値を措く

(15) 同上、16 ページ

(16) 否定神学についての斬新な解釈は、笠井潔『例外社会』朝日新聞出版、2009 年の「第 6 章 否定神学と 90 年代の切断」参照。

といった二項対立的発想から自由であることは、明らかである。

ハイデガーに代表される 20 世紀の否定神学的思考が、亀井勝一郎のなかに、形を変えて現れていることはまちがいない。だが、亀井にあって、歴史という存在者から見棄てられ、無念の思いに沈むとき、背後から現れるのは、もっぱら同一的存在者への否定のモメントなのである。そこにあらわれる精神のかたちが、どんなに無償性と犠牲のおこないによって生まれようと、結局は、同一的なものへの対抗価値にすぎないものとなっていく。悲痛と暗澹のなかから探り出された「古典の精神」は、「文明の毒に対する最良の妙薬」でなければならず、「病める精神に対して的確な診断を欠くとき、妙薬すら毒となる」とされるのである。

このような亀井の思考が、「近代の超克」理念の一翼を荷うものであったとするならば、変化発展する歴史に対して、永遠に変わらないものを描く小林の歴史観は、やはりこれに重なるとはいいがたいものがあった。一見すると、そこには明らかな二項対立の図式が描かれているように見える。だが、小林にとって、永遠に変わらないものとは、無償性や犠牲のおこないによって生まれるものではない。それは、ある精神のかたちなのである。いってみるならば、この精神は、歴史を打ち勝ちがたいものとみなし、この同一なるものと戦う仕方だけを取り出してみせる。その仕方のなかにだけ、変わらないもの、永遠とっていいものがかいまみられるというのが、小林の立場なのである。

ここには、亀井とは異なった文脈での否定神学的思考が影を落としていると考えることもできる。小林にとって、同一なるものと戦うのは、そのものによって、かけがえのない何かを喪失せしめられたからである。ハイデガー的이라면、存在者に見放され、喪失へと投げ出されたからなのだ。「歴史は人類の巨大な恨みに似ている」という小林の言葉は、そのような存

在の被投性をいうと受け取ることができる。

だが、小林における否定神学は、ここから存在の呼び声を聞きとめるという場面へと向かわないのである。シモヌ・ヴェイユの、存在しない神に祈るといったモチーフはのぞむべくもないのだ。神や存在という概念に、なじみがたいものが感じられるというのであれば、ヘーゲルの絶対精神、カントの最高善といったものが視野に入ってこないといってもいい。

トマス・アクィナス以来の否定神学的思考とは、同一者の不在という現実と直面しながら、なおかつ、存在しない同一者をよびもとめるというものであった。だが、そこに、デリダによって、同一的なものの謎という論脈のもとに批判された思考の型が忍び込んでくることを否定できない。同一者の存在しないという事態をそのままに受け容れ、そのことに耐えるのでないならば、どのような真摯な祈りも召喚も結局は、同一的思考に浚われてしまうというのである<sup>(17)</sup>。

小林の思考に、この徹底したロゴス中心主義批判のモチーフがはらまれていたとするならば、ヘーゲルやカントの思考の型と同調しないのは当然といえることができる。だが、たとえ小林が、ロゴス中心主義批判の立場をデリダに先んじて進めていたとしても、そのことをもって、20 世紀の否定神学的思考を覆すことになったとは断定できない。そこには、デリダの批判では容易に解体することのできない根拠があったからだ。

存在しない同一者の場所に、ロマン的イロニーとしての日本文化の精神、そのかそけきさまを措いた保田與重郎の思考を例に挙げてみてもいい。それが、亀井ほどには西欧への対抗原理を押し出すものではなく、むしろ、小林の歴史意識に近いものがあったとしよう。たとえそうであっても、シモヌ・ヴェイユやハイデガー、さらにはハンナ・アレントといった同時代の思想家のなかにはらまれた、他なるものへの関心

(17) デリダの否定神学批判と新たな否定神学についての考察は『名を救う—否定神学をめぐる複数の声』小林康夫・西山雄二訳、未来社、2005 年、参照。

が決定的に欠けているのだ。

現存在が気遣いとしてあるというハイデガーにしても、重力に打ち沈んでいく魂の、恩寵のようにやってくる愛の姿について語ったヴェイユにしても、奪われた生を生きる存在の、パブリックなるものへのモチベーションを探り続けたアレントにしても、召喚されているのは、複数性としての神、関係としての神なのである。

不在の神というものをそのようにとらえるならば、カントの最高善にも、ヘーゲルの絶対精神にも、まちがいなくこのモチーフがこめられていた。それを政治思想としてみたとき、不在の神はカントにあって、世界共和国として要請され、ヘーゲルにあって人倫国家として措定される。そこには、非社会的社交性、自由の相互承認といった理念によって、精神の隘路を通過してきた思想の力が確実ににはたらいているのである<sup>(18)</sup>。そして、20世紀の否定神学的思考が、このカントやヘーゲルの思想を影のように背負ってみずからを脱構築していったものであること、その濫觴が、マルクスの批判思想であったということ、そのことの重大さは、どんなに強調しても強調しすぎることはないのである。

## 不在の神という逆説

知的協力会議主催の座談会「近代の超克」が開かれた実際の日付は、1942年7月23日と24日である。

真珠湾攻撃から、すでに半年以上がたち、当初日本海軍優勢のもとに進められた太平洋海戦も、6月から7月にかけておこなわれたミッドウェー沖の戦いにおいて、明らかな劣勢に立たされることになった。大本営発表が、戦況についてどこまで真実を伝えていたかは測りがたいのだが、小林を始め座談会に出席した亀井勝一郎、河上徹太郎、中村光夫、林房雄、三好達治、諸井三郎、津村秀夫、吉満義彦、西谷啓治、下村寅太郎、鈴木成高、菊池正士といった13名

のメンバーのなかに、日本海軍の劣勢とこの後の太平洋海戦における撤退を予測できた者はどれだけいただろうか。マレー沖海戦から、ジャワ島、バリ島、セイロン島と勝利をおさめていった日本海軍の勢いは、とどまることを知らずといった印象を国民一般に与えていた。そうとすれば、彼らが戦局を冷静な眼で観測することができなかったとしても、やむをえなかった。

しかし、この13名のメンバーのなかで、少壮の文芸批評家であった中村光夫と西欧古典音楽の精神を体現した作曲家、諸井三郎の発言には、京都学派の哲学者、歴史学者にも、河上や、亀井といった既成の文芸批評家にもみとめることのできない独自の考えが提示されていた。彼らの思考をたどっていくならば、その後3年にわたって太平洋と東アジアにおいてくりひろげられた戦争が、日本をどこに連れて行くかの見取り図を描くことができるっていいほどなのである。

たとえば、中村は、西欧近代というものが、中世的世界像のなかで信憑されてきた神的な秩序の毀れをきっかけとして現れたものであることを指摘する。「神を無条件に信ずるわけには行かなくて、神というものを自分で確かめて見なければならぬ。たとえば自然なんというものも、今までの概念に頼って考えて済ませているわけには行かない。自分の手で実験して見なければならぬ。何かそういう未知の秩序というものに、人間の精神がその中で生きることを強制されて、そのためにいろいろ混乱を起している。そういうことに僕は近代の特質というものの根本があるのじゃないかと思います」。そして、「近代の超克」ということを真剣に考えたのは、「現実の秩序の混乱に向かって、どういふふうにして生きるか、そういうことを根本的に考えた人々である<sup>(19)</sup>」というのである。

ここにあるのは、簡明な言葉で素描された否定神学的思考のかたちにはほかならない。明治以来、西欧近代というものが、科学文明、物質文

(18) カントの「世界共和国」、ヘーゲルの「人倫国家」については、それぞれ、柄谷行人『世界共和国へ』岩波新書、2006年、竹田青嗣『人間の未来』ちくま新書、2009年、参照。

(19) 河上徹太郎、竹内好他『近代の超克』富山房百科文庫、1979年、203ページ

明の代名詞のようにみなされるのは、日本の近代化が、そういう科学技術を専らとして発展した西欧近代の摂取によって成り立っているからである。だが、どのような文明であろうと、それが現実の秩序の混乱をいかに生きるかという関心によって打ち立てられたものであるならば、そのようなゾルゲを受け継ごうとする思考が、文明を摂取した側にも起こってしかるべきである。そう述べることによって、中村は、「近代の超克」というものが、存在しない神に対する強い関心を引き受けることによってなされなければならないことを示唆するのである。

同じように諸井は、音楽芸術を題材にしながら西欧近代を浪漫主義という流れのなかでとらえる。個性の尊重と人間中心主義に裏打ちされたそれは、19世紀から20世紀にいたって印象主義と表現主義の芸術を開花させるのだが、そこにあらわれたのは「絶対純粹の世界」であり「純粹な否定の世界」である。主観性を高揚させ個性を燃焼せしめる浪漫主義的精神は、記号と形式と論理への嗜好と知性の尊重へと変わっていったかにみえる。だが、近代科学文明もまた、このような変遷をたどりながら、確実に物質主義的で、メカニカルな制度をかたちづけてきた。したがって、これを超克するには、主観主義に対抗するように客観主義を掲げることもなければ、夾雑物を一切遮断した純粹知性をよりどころとすることでもない。

こう語ることによって、諸井は、より建設的で、積極的な文化の創造ということを提唱する。そこにおいて「根本となるのは、精神の恢復という事である。本来手段であるべき感覚をふたたびその位置に戻し、精神の優位を確立する事である」。「精神に優位を置く事は、総ての形式的なものを下位に置く事であるが、しかしそれと形式的なものを軽んずる事とを混同してはならない。要は形式的なものをその本来の位置に置き、精神が常にそれを生み出すという正しい関係を確立することである」。「精神は常に形式や感覚の主人であって下僕であってはならない。

日本の古典を探求する事もまたこれと同じ意味で、吾々が根源的なものに就く事なのである<sup>(20)</sup>」。

ここにあるのは、純粹な否定性や禁欲的な知性といったものを、他なるものの媒介によって、精神の自由へと編み変えていこうとする態度である。精神とは、自己完結的なものではなく、相互の関係のなかから生起してくるものにほかならない。それを、諸井は、ヘーゲルやカントの思想をたどることによってではなく、「美の為に破り得ない法則はない」と語ったベートーヴェンの音楽をまねぶことによって明らめるのである。

中村光夫や諸井三郎の言葉が、「近代の超克」「世界史的立場」の掲げる二項対立的イデオロギーのなかで、ともすればかき消されそうな状況にあったとき、これを明確な理念として持ち上げようとしていたのは、小林秀雄でも西田幾多郎でもなく、アメリカ合衆国国務長官コーデル・ハルだった。41年9月における日米交渉において日本側に提示していたノートのなかに、その理念は盛られていたのだが、そこに掲げられた民族国家連合と国際的なユニオンの構想は、国際連合憲章として、練り直されることになっていた。

それが、カントの世界共和国の理念、そしてヘーゲルの世界精神のあらわれとして、総力戦と絶対戦争によって見失った神の存在を、もう一度呼び求めるようにしてかたちづくられたものであること。そこには、まちがいなく、20世紀の否定神学が影を落としていたということ。その予兆を、中村光夫、諸井三郎という人たちの言葉のなかに読みとることができるとするならば、座談会「近代の超克」の果たした役割も、あらためて評価されなければならないということになるうか。

国際連合憲章が、米国国務省において練られていた43年、戦況は、ガダルカナル島撤退を皮切りに、サイパン島、テニヤン島、グアム島陥落と続いていた。翌44年になっても、マリ

(20) 同上、57ページ

アナ沖海戦、レイテ沖海戦、インパール作戦と敗北は重なり、45年の硫黄島の戦いをへて、沖縄戦での壊滅的な打撃、そして、8月6日の広島原爆投下、9日の長崎原爆投下によって、ついに日本は無条件降伏を受託することになったのである。

その間、国際連合の構想は、44年11月、ハルの国務長官辞任にいたるまで何度も練られていたにちがいない。それが、「言語に絶する悲哀を人類に与えた戦争の惨害から将来の世代を救い、基本的人権と人間の尊厳及び価値と男女及び大小各国の同権とに関する信念をあらためて確認」（国際連合憲章 前文）することをめざしたものであることは、まちがいがなかった<sup>(21)</sup>。

だが、このことはどうしても確認しておかなければならないのだが、日本の無条件降伏が、8月6日の広島原爆投下と、9日の長崎原爆投下、そして同9日のソ連による満州侵攻によって決定的なものとなったという事実には、ウィルソン、ルーズベルト、ハルの構想した民族国家連合とそこにこめられた不在の神への祈りといったものを、一方で踏みじめるような力がくわわっていたといわなければならない。

44年11月におけるハル国務長官辞任と翌45年4月におけるルーズベルト大統領急死によって、この力は普遍的な国家連合の構想を骨抜きにするような形で起こってきたのである。それは、ルーズベルト急死を受けて大統領に就任したトルーマンのなかに形をとって現れてきたのだが、原爆という巨大な暴力によって、戦後世界の覇権を握ると同時に、実質を欠いた文字通りの不在の神としての国際連合を設立することを進めていった。一方で、このような力の顕現を感じたもうひとつの力が、スターリンをして満州侵攻と中国共産党政権の成立へと促したことは、疑う余地のないことであった。そして、ここに現れた二極均衡型の覇権国家体制は、「近代の超克」「世界史的立場と日本」において

表明された二項対立的対抗理念の世界大における実現でないということは誰もいえないのである<sup>(22)</sup>。

もしそうであるとするならば、歴史とは人類の巨大な恨みに似ていると語った小林秀雄の歴史観にも、いまだ再生の余地があるといっているのかもしれない。

(21) コーデル・ハルの国際連合の構想については、『ハル回顧録』中公文庫、2001年の「36 世界平和のための米国の役割」参照。

(22) アメリカの原爆投下とソ連の満州侵攻をめぐるトルーマン、スターリンの攻防については、長谷川毅『暗闘 スターリン、トルーマンと日本降伏』中央公論社、2006年の「第五章 原爆とソ連の参戦」参照。